ドラゴンクエストＶ～イレギュラーな冒険譚～

むぎちゃ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲーム好きな少女ミレイは交通事故で命を落とした。

元の世界に帰る為には転生した世界で役目を果たさなければならない。

果たして彼女は元の世界に帰れるのだろうか。

暁とのマルチ投稿ですが大なり小なり相違点があります。

目次

第一話　最後のゲーム　―――― 1
第二話　帰して　―――― 10
第三話　邂逅　―――― 16

第一話　最後のゲーム

まだ5月上旬だというのに、初夏のように暑い。私達はこの季節外れな暑さについて愚痴を言いながら帰路についていた。

「今日さー、めっちゃ暑くない？　まだ梅雨すら来てないのに」

マイが、レナにそう言った。

「ねー、暑いよね。今日見た朝のニュースでお天気係のお姉さんが『本日は絶好の洗濯物日和でしょう。天気が崩れる心配もなく、一日中干していても大丈夫です。安心して出勤しましょう』と言っていたけど、絶好すぎだわ。これも地球温暖化の影響ってやつ？」

レナは頷きながらそう言って、話を私に振った。

「ミレイもさ、この天気おかしいと思うでしょ？」

私はすぐに返事をしようとしたけど、何しろ周りが暑くて頭がポーッとなってて、なかなか思考がまとまらない。私がレナに返事をしたのは、話を振られてから数十秒後の事だった。

「……うん、ホントだね。暑いね」

「でしょでしょー。　……ってミレイ顔真っ赤になってるけど大丈夫!?」

若干慌ててレナが私に言った。
「大丈夫だから心配しなくても平気だよ、レナ。あとちょっと歩けばもう家だし」
私を心配してくれているレナに、笑いながらそう言ったけどレナは口を尖らせた。
「返事するのに数十秒かかった人が何言ってんの」
「そうそう。いくら家が近いからって油断すると暑さで倒れるかもしれないからね。嫌だよ私、救急車呼ぶの」
マイが続けて言った。
「ちょっとマイ、それは冗談でもひどいよ」
レナが少し咎めるような口調でマイに言った。
「ごめんごめん」
マイはペロリと（どっかのキャラクターみたく）舌をだして肩をすくめた。
そんなイタいポーズをしているマイはスルーするとして私達は2人で話す事にした。
「話変わるけど今週の土曜日一緒に遊ばない？」
「別にいいけど、どこで遊ぶの？」
「私の家は？」
「でもミレイの家だとやる事といえばゲームしかないよね」
「わかった、私のポーズが寒かったのはわかったから無視しないで！」

私達のスルーに耐えかねて泣きついてきたマイにレナはため息をつきながら言った。
「マイのあのポーズは寒いじゃなくてイタいだからね。そこ勘違いしないで」
「わかったから会話に入れて」

「やっぱり遊ぶんだったら、近くの児童館とかはどうかな?あそこだったら色々やれるじゃん」
会話に加わるなり、マイは私達にそう提案した。
「児童館かぁ……。確かにいいね」
頷きながらレナは言った。
「じゃあ、何時に集まる?」
「10時でいいんじゃない?」
「えー、10時ー?」
私は基本的にゲーム好きな人間だから、休日の時は夜更かししてまでゲーム（特にドラクエ）をやりたいので朝は遅い方なのだ。そんな私にとって10時集合は意外と難しいのだ。
「そう10時。夜更かししてゲームしたいんだろうけど、ちゃんと時間には間に合うように起きてね」

そしてその事をしっかり理解しているマイに釘をさされ、ぐぬぬとなる私。
そうこうしている間に気がついたら交差点まで差し掛かっていた。
「じゃあ私こっちだから。また明日ね」
ミレイは2人に手を振って、横断舗道を渡った。
「あっ。わたしこっちだから。じゃーね2人とも。」
「バイバイ。ミレイ。」
「また明日ね」
2人と別れ、家に向かって歩く。（幸い家は2人と別れた交差点からそう遠くないところにあった。）
「ただいま～」
家に帰るとお母さんがリビングのソファに座って（イケメンの俳優が主人公の）映画を見ており、私にチラリと目を向けた。
「お帰り」
私は適当に返事して、冷蔵庫から麦茶をだすとコップについで一気飲みした。冷たい麦茶が喉を潤していくこの感覚がたまらなく気持ち良く、内側から熱くなった私の体を冷やしてくれた。
「プッハー！生き返る」

あと少し麦茶を飲むのが遅れてたら誓ってもいい。ミイラになっていた。

「さて、ゲームしよ」

６時からの塾にはまだ余裕がある。宿題もある程度進めたし没頭しなければ無問題。

……没頭しなければネ。

「なにやろっかな。ドラクエかＦＦか。パズドラやポケモンもいいな」

自室のゲーム棚を眺め何をやるか考え、そして決めた。

「ドラクエ５（ｐｓ２版）やろ」

ドラクエ５のディスクとメモリーカードをプレステ２に入れ、起動させる。しばらく経つとテレビ画面にタイトルデモが浮かび上がり、しばらくするとメニュー画面になった。

「今確かサラボナまで進めたから死の火山の攻略がんばろう」

火山系ダンジョンは溶岩でいちいちダメージくらって少しウザイが仕方ないと割り切り攻略を始める。

メンバーは主人公、ピエール（スライムナイト）、ゲレゲレ（キラーパンサー）、メッキー（キメラ）という構成で、レベルも装備もしっかりしているからそう簡単に負けるはずがないし、２軍もいるからそう簡単（ｒｙ

……そう思っていた時期が私にもありました。

ボスには案外楽に辿り着けたんだよ、うん。ボスまでは。
でもこいつらの強いこと。あっという間にボコボコにされた。（ていうか、一撃のダメージ大きすぎる……。）
うわボス強え。困ったときのサイト頼みとｉＰｈｏｎｅで攻略情報を調べ、再びボスに挑む。攻略情報の通りにしてたら楽に倒せた。（あるよねそういうパターン。）
それから仲間モンスター集めたり、レベル上げしたり、ストーリーを進めたりしていた。
しばらくの間それに熱中していたけど、それを（凍てつく波動のように）消したのはお母さんの声だった。
「ミレイーー！今日塾でしょ？行かなくていいの？」
うん。今日は塾あるけど？それがどうしたのかな？
……。
塾？えっ、ちょ、待っ、塾？
慌てて時計をみると５時半だった。やばい！もうこんなに時間が経っていたとは。ゲームは時間の狩人とはよく言ったものだ……じゃなくて！やばいやばいよ！
滅茶苦茶パニクる私。しかも塾のノートを広げてみると宿題がまだ結構残っている。
（あるよねそういうｒｙ）

私は奥義丸写しを繰り出したが、塾まであと15分という頃になっても宿題は終わらなかった。
「そろそろ行かないと遅刻するわよ」
「わかってるって！」
私は猛スピードで塾の仕度をすると、家をでた。
「行ってきます！」
「いってらっしゃい。がんばってね～」
リビングで映画を見ながら、紅茶を飲んでいるお母さんを少し……いや滅茶苦茶羨ましく思った14歳の春の日でした。

＊

「宿題とかマジ疲れたわ」
宿題をやってこなかった罰として居残りで宿題をやり、更に宿題をやってないまま来ないよう今日の宿題までやるはめになった。唯一良かったのは来週まではフリーになったということだった。
「はぁ～疲れた～。家帰ったらゲームしよう」
幸いにも今日は特に学校の宿題は出ていないし、朝の集まりとかもないからのんびり

とゲームを進める事が出来る。
「なんとか水のリング入手までは進めたいな」
　偶然にも信号が青だったので私は横断歩道を渡ろうとしたら急ブレーキの音が聞こえた。横を見ると大型トラックが私の目の前に迫っていた。
全身の血が冷たくなるのを感じる。時間が蜜のようになる。
え？なんで？今信号青なのに。まさかこの歳で死ぬなんて勘弁してよ。やりたいゲームがたくさんあるし、ゲーム以外にもやりたいことがあるんだから。まだ１４歳なのに。青春も何もかもまだこれからなのに。お願い神様。
　そんな私の願いは届かずにトラックが私に突っ込んだ。
最後に私が感じる事が出来たのは轟音と誰かの叫び声。ただそれだけだった。
目の前が暗くなって、そして……そして何もわからなくなった。

「どういうことだ」
　スーツに身を包んだ２０代前半の男がタブレット端末の画面を見て呻いた。そこにうつっていたのは、１人の少女。
　少女の顔写真の隣に少女の名前が表示されていた。少女の名は小宮山ミレイ。そ

の下には、こう表示されていた。『享年１４歳　２０１４年5月１３日９時４２分死去』
男はもう一度どういうことだと呟くと、続けてこういった。
「小宮山ミレイは、まだ死ぬべき時ではないのに！何が起こっている？彼女は何故事故にあったのか。それを調べなくては。クソ、こんな事が起きるとは。とりあえず彼女にはしてもらわなければな。……神様転生を」
男はそういい、何処かへと去って行った。男は人間ではない。男は人間の言葉で表すなら死神という存在であった。
本来死ぬはずがなかった少女と、困惑する死神。この時確かに世界のどこかで何かが狂った。

第二話　帰して

不思議な感覚と共に目が覚めた。

「う～ん。ここは…？」

私は起き上がって、あたりを見回す。ここは今いるはずの横断歩道ではない、黒一面の世界だった。

その世界は何もなかった。

光も、温度も、何もかも。

「まさか、私は死んだの？」

自分で声に出してみた。否、そんなはずはない。きっとこれは夢のようなものだ。病院にいる自分が見ている夢だ。死んだわけがない。そうやって自分を納得させようとするが、気持ちの悪い不安は拭えそうになかった。

「取り敢えず歩いてみよう」

そう言って私はこの空間を歩き出す。すぐにこの空間がおかしなことがわかった。何も……足に感じない。地面を歩けば土の、床を歩けば木やコンクリートの感触が足に伝わるはずだ。例え宙を歩いていたって、こんな何も感じないなんてありえない。

……本当にどこなんだここは。

私がその事を考えて背筋が凍てついたところで、この漆黒の世界に若い男の声が響いた。

「お待たせしました」

私は声がした方向を見る。そこにはスーツ姿の男がいた。パッと見、２０代前半。穏やかそうな顔をしていて、片手にはタブレット端末を持っている。

「あなたは誰？」

「私は死神の小池と申します。今回あなたの神様転生を担当させていただくことになりました。よろしくお願いします」

神様転生。その言葉の意味は私にはよくわからなかった。

でも目の前の男は自分の事を死神と呼んだ。それが表す事は。

「神様転生？それに死神？死神がここにいるってことはもしかしなくても私は……」

「ええ。お亡くなりになられました。即死です」

男はタブレットの画面を見ながら淡々と言った。

「そんな……」

足元が崩れ落ちるような気がした。そんなのひどすぎる。高校、大学と進学して会社に勤めてそのうち運命の人とあって結婚するんだと思っていた。そんな未来予想図を

漠然と描いていた。なのに……なのに……。

「気を落とさないでください。あなたは生き返れる」

死神が私に言ったその言葉は何よりも私をひきつけた。

「本当なの？本当に……私は生き返れるの？」

すがるように言葉をしぼりだす。死神は答えた。

「ええ。生き返れますよ」

「じゃあ、すぐにでも……！」

生き返れるんだったら生き返して欲しい！そう私が思っていた直後に男は信じられない事を平然と私に言い放った。

「ゲームの世界へと」

しばらくの間時間が止まったような感覚がした。

心が小池の言った言葉の意味を受け入れるまいとしているが、無情にも頭はその意味を受け入れてしまった。

そして私の胸に湧き上がってきたのは怒りと悲しみだった。

「ゲームの世界!?ふざけないで!!私はゲームの世界とかよりも、友達とだべって！テスト勉強に追われて！塾に遅刻しそうになって！色々大変な事もあったりするけど、私はそんないつもが、現実が好きだった！生き返らせるなら元の世界に帰して！」

私は息継ぎもせず、一気に言葉を吐きだした。怒りと悲しみで頭がガンガンする。
死神は黙っていたが「すみませんでした」と謝罪した。
「そんなこといったって状況は何も変わらｎ「しかし、元の世界に戻れないわけではありません。」
えっ？
「元の世界に戻れるの？」
「けしてすぐではございません。それに険しい道のりとなるでしょう。それでもやりますか？」
「やるに決まってます！」
本当は怖かったけど、覚悟した。
私のいつもに帰るためにも。
「わかりました。では、説明に入りますね。あなたが元の世界に戻るには、ある世界に神様転生し、役目を果たすことです。」
「その役目とは？」
「あなたの事故死は神の誰かが起こしたもの。運命を狂わされた今のあなたの魂は、元の世界に戻ることは叶いません。しかし、別の世界だったら、転生できます。そして役目とは転生した世界で神を見つけることです。」

「私が転生する世界に元凶がいると？」
「いえ。更に説明しますと、あなたが死んだことにより、『本来死ぬはずがない人間が死んだ』という事実によりありとあらゆる世界に影響が生じました。その世界のいずれかにあなたが行って『影響』を消す事で、あなたを殺した神を見つけることができるでしょう。
　タイムリミットはミレイさんの命が亡くなるまでですが影響は様々な形で現れているため気がつかずに生涯を終える可能性もありますし、転生した世界で何かしらにより死んでしまっても戻るチャンスは無くなりますがよろしいでしょうか？」
　よろしくないと言いたかったのを堪え、大丈夫だと答えた。
「では、神様転生に入りますね。どこの世界に転生しますか？」
　私は少し考え、ある一つの世界に決めた。
「ドラクエ５の世界で」
「わかりました。神様転生をするにあたり特殊能力をもらえますが何にしますか？」
　戦いといえば喧嘩程度しかしたことのない私が真正面から魔物と戦えば間違いなく死ぬ。しかし、魔法の力があればこんな私でも戦いに勝つことができるかもしれない。
「魔法の力をお願いします」
「わかりました。それでは、転生を開始しますね。時系列は？」

「青年時代前半の大神殿脱出前まで」

「わかりました。」

小池が手を振ると光の門が現れた。私はそこに入る前にこう言った。

「すみませんでした。あんなに怒ってしまって」

「いえいえ。謝るのはこちらの方ですし、怒るのも無理はないと思います。」

「では、いってきます」

「ご武運をお祈りしてますよ。死神が祈るのもおかしな話ですが」

私は光の門に近づく。この門を通れば後戻りはできない。だが、それが何だというのだろう。私は薄く笑い、門をくぐった。そして光に包まれた。

第三話　邂逅

光を潜ったのと同時に意識を失い、目を覚ましてみるとそこは日光が注ぎ込む明るい森の中だった。

体を起こし、服についていた土や草を払って辺りを見回すと樫の杖と一つの袋と手紙が置いてあったのでそれらを拾う。

手紙を広げると、そこにはこんな内容が書かれていた。

『ミレイさんへ。

この手紙を読んでいるということは無事にドラクエ５の世界へ転生できたようですね。それでは、あの場所で説明しきれなかった部分を説明します。

先ず特典ですが大体の魔法は使えますが鍛錬を積まない限り習得はできません。しかし、基礎的な魔法だったら現時点でも全て行使できます。

ちなみに消費するＭＰはドラクエ５に出てくる呪文は全てドラクエ５準拠、それ以外は初出の作品での消費ＭＰとなります。

次の説明ですが、『影響』についてです。

『影響』は本来起こるはずのなかったあなたの死により、運命が狂った結果、世界に本

来起こるはずだった事が変化してしまう現象です。こちらが確認している限りでは今はまだこれといって『影響』が出ていないですが、『影響』を確認しそれがミレイさん一人では対処しきれないという場合には私がこの世界に訪れ、あなたのサポートを行います。

ちなみに『影響』が起こるのは、この世界以外の世界にも起こりますが、どの世界にも関わらず『影響』を消すことで神を見つけることができます。『影響』の消し方は『影響』で変化したものに遭遇する事で手がかりが得られます。

最後の説明ですが、あなたの頭にはこの世界の常識や知識といったものをあらかじめインプットしていますので、勝手が違って困ると言った自体はないようにしています。

説明はこの3つで終りです。がんばってください。

あなたの神様転生担当死神小池より』

手紙を読み終えた後に、私は思わずこう言っていた。

「最初からそういう事を言えよあの死神！」

……まぁ結構長く怒ったり泣きじゃくったりしていたから時間を使っちゃったからしょうがないんだけど、せめてそういう説明はきちんとして欲しかった。特に『影響』の部分。

でも私は1人じゃないということがわかっただけ心が軽くなった。

森を出ると、目の前には見渡す限りの空と海と大地が広がっていた。吹いてくる穏やかな風を肌で感じながら、大きく背伸びをして深呼吸をすると、前を見据えた。

「よし！オラクルベリー目指して出発！」

一歩前へ踏み出したその時、目の前にベビーニュートとスライムが現れた。どっちも可愛いから攻撃するのはつい躊躇っちゃったけど、向こうはそんな私の心情など知らないので容赦なく襲いかかってくる。

勢いよく飛びかかってくるベビーニュートに慌てて呪文を唱えた。

「ギラ！」

詠唱した瞬間、杖の先から金色の炎が広がってベビーニュートを焼きつくした。ベビーニュートは、黒い塊のようになると、ドロリと崩れゴールドを残して消えた。更に残っていたスライムはすかさずメラを打ち込んで撃退する。

「ビックリした～」

なんとか初戦闘は無傷で済ませることができたけど、次の戦闘になった時に無事に勝利できるとはかぎらないから、なるべく早くオラクルベリーに移動することにする。

その後もいくつか戦闘はあったけど順調にモンスターを倒して、無事にオラクルベリーに到着することができた。

街に入って辺りを見回すとゲームの世界にそのまま入ったというよりは、ゲームのオ

ラクルベリーを模した街にいるみたいだ。
カジノは私の目の前に堂々と建っていたけど、カジノの象徴であるネオンはその光を灯していなかった。まだ準備中らしい。
仕方がないので、宿屋の部屋を確保しよう。そして身の振り方を考えよう。
そう思い、宿屋に入ると人の良さそうな花柄のピンクのエプロンをつけたおばさんがカウンターから迎えてくれた。
「可愛い魔法使いの女の子一名御来店！泊まるかい？」
おばさんはカウンターの奥にそう言うと、私の方を向いた。
「は、はい」
可愛いと言われたことに内心嬉しさを感じつつも私はひとまずそう返事をした。
「宿泊の日程は？」
「えーと、少し考えさせてください」
「ああ、いいよ。並んでいる客もいないしね」
おばさんは、にっこりと微笑むと快く了承してくれた。
「ありがとうございす！」
おばさんにお礼を言うと、袋の中を覗き込んだ。中にはモンスターを倒して得たゴールドと薬草（と手紙）がいくつか入っている。今の所持金は５０ゴールド。この宿屋の

一泊の値段が５Ｇだから９泊はできることになる。
金策はカジノでするとして、コインが一枚につき２０Ｇだから無駄なく泊まるには５０÷２０＝３０、３０÷５＝６で５泊６日がベターかな。
「５泊６日で」
「はいよ。料金は３０Ｇ」
３０Ｇを袋から出して、おばさんに手渡した。おばさんはＧを足りてるかどうか確認し、Ｇをカウンターの引き出しにしまうと宿帳と鍵をカウンターに置いた。
「宿帳にサインをお願いね。部屋は２階の２０４号室だよ」
「ありがとうございます」
宿帳にサインをし、鍵を持って階段を登り２０４号室の扉を開けた。
中の調度品は大きいものはベッドと机とタンスがあった。机の上には小さな本棚が置かれていて、ベッドの近くには鏡が立てかけてある。
窓の縁には花が生けてあり、その色鮮やかさもさながら窓からさす日差しにより、美しく輝いていて、見ていた私の心を落ち着かせてくれた。
一先ず袋と樫の杖をタンスにしまい、ベッドに寝転ぶ。
不思議なことに一回寝転んで体の力を抜いただけなのに急に睡魔が襲ってきた。目の前が歪んだと思ったら私の意識は何かに吸い込まれていった……。

目が覚めて窓の外を見ると、もう昼ではなく夕方だった。
ベッドから起き上がり、鏡を見ながら乱れた髪を整えるとタンスから袋と樫の杖を取り出して部屋を出る。鍵を閉め、下に降りるとおばさんに、外に行ってきます、と伝えてオラクルベリー周辺の草原に出た。
辺りを見回すと、魔物達が私に近寄ってきている。さっきまでとは違い数が多い、正直怖かったけれど、杖を構えて呪文を唱えた。

何度か戦闘を重ねてとりあえず必要最低限のコイン代は確保した。
「やっと溜まったなぁ～」
自分の部屋の机の上に置いた袋の中身を見ながら満足げにそう呟いた。これで後はカジノが開かれるまで時間を潰すだけ。
それまで何をしていようかなと思っていたその時に部屋の扉がノックされた。
「ミレイちゃん、夕食ができているけれど食べるかい？」
「食べます！」
私はおばさんに返事をして、下の食堂までおばさんと一緒に降りて行った。
「はい、今日の夕食はデミグラスソースのハンバーグにライ麦パンにサラダだよ。ド

レッシングと飲み物は何にするかい？」
「ドレッシングはオニオンソースで。飲み物はぶどうジュースでお願いします」
「了解。しばらくの間席に座って待っていなよ」
　私はおばさんから見えやすい席に座り、しばらく待っていたら料理が運ばれてきた。
「しっかり食べなよ。あんたは食べ盛りの頃なんだから」
「はい。いただきます」
　ハンバーグを一口食べてみると濃厚な肉の味が口にじんわりと広がった。サラダの野菜も新鮮な上にオニオンソースの相性も良く、シチューはミルクのコクや具材の旨みが全て凝縮されていてとても美味しかった。
　やっぱり生きてるって素晴らしい事を教えてくれるものの一つは料理だな。
　……お母さんの料理が懐かしいな……。そう思うと涙が滲んできた。
　自分が涙ぐんでいた事に気がつくと慌てて私は涙を拭った。流石に他の人に見られたら恥ずかしすぎる。
　食事を終える頃にはもうカジノが開店する時刻にはなっていたので仕度を整え、カジノに向かった。
　中に入るとたくさんの人たちがポーカーやスロットなどをやっていて、カジノにはパ

チンコ屋みたいな熱気が渦巻いていた。（入った事ないけど）
「いらっしゃいませ！当カジノのご利用は初めてでしょうか？」
受付のバニーさんが笑顔で話しかけてきた。正直に言うと、まだ１４歳の私がカジノに入る事で怒られてしまうのではないかと思っていたけどその心配はなさそうだ。
「はい。初めてです」
「では、お客様のコイン口座を作る必要がありますね。お客様のお名前は？」
「ミレイです」
「ミレイと……。年齢は？」
「１４です」
バニーさんは私の名前と年齢を手帳に書き込むと、笑顔でこう言った。
「お客様の名前の登録完了致しました。コインの売り場は反対のカウンターにあります。それでは当カジノで楽しい時間をお過ごし下さい！」
登録手順がそれだけでいいのかと思いつつもカウンターに向かい、コインを５枚買った。残金０。まぁいい。換金すりゃいいだけの話だ。私は先ず元手を増やすためドラクエ４にもあったモンスター闘技場で賭けを始めた。
試合の最初の２、３戦目までは順調に勝ち進められてコインを増やせたけど４戦目で軽く負けて５戦目で持ち直したと思ったら６、７戦目で２連敗したので一旦やめてポー

カーで増やすことにする。
運よく一回でダブルアップまでこぎつけ、５回連続でダブルアップに成功したところでダブルアップをやめた。正直言ってこれ以上は心臓がもたない。コインの総数は１万と少し行ったし大丈夫だろう。
コインをカゴに入れて交換所まで持っていくと交換リストにあったはやてのリングと祈りの指輪をそれぞれ１０個ずつ交換する。これで大部分が一瞬にして消えたけれどこれで資金源は確保できたから安心だ。
それはともかくはやてのリングなんて確かドラクエＶにはなかったはずだからこれも『影響』によるものなのだろうか。
とりあえず今日はもう夜遅いから宿に帰って寝ることにしよう。そして明日品物を換金しよう。
翌日。
はやてのリングと祈りの指輪をそれぞれ１個ずつ手元に残して残りを売却すると２７４５０Ｇを確保できた。
その後私は、服や道具袋、装備などを買い揃える。幾つか見定めて決めたのが武器：樫の杖、盾：ライトシールド、鎧：毛皮のドレスだった。
とりあえずもう少し実力を上げるために草原に出、魔物との戦闘を繰り返す。戦闘を

重ねていくうちに新呪文の「ザオ」と「スカラ」を覚えた。
魔物がいない木陰で一息休憩をしながらこの後どうするか考える。
もうこの辺の敵は大体狩りつくしたから少し敵が強いエリアに行こうか。
「ま、大丈夫だと思うけど」
魔物にやられることなんてない。その時私は自分の力を過信していた。呪文も使えるし、戦闘慣れはしているから心配ないと。
そして私は現実というものをその肌で感じさせられる事となった。
「きゃっ！」
ベビーニュートの不意打ちに転んでしまった。私はすぐにメラを唱えベビーニュートを倒す。しかし他にも魔物はいた。
魔物達が、襲いかかってきた。バギ、ギラといったグループ魔法で相手を倒し鞭で薙ぎ払ったがまだ敵は出てくる。
樫の杖が手からはたき落とされた。そして私の腕に容赦なく何かが噛みついた。
「ーーーーーーッ!!」
とてつもなく痛い。そして妙に温かい。腕を見るとガップリンが私の腕に食らいついていた。
「離してっ！嫌だあ！」

叫びながら勢いよく腕を振りますけど、ガップリンは離れてくれない。そうしてガップリンにかまっている間にベビーニュートの突進を腹にくらい、地面を無様に転がった。

「助けて……。助けて……」

怖い。怖い。身体中が痛い。嫌だ。怖い。誰か、助けて。より興奮したのか魔物は更に群れをなし、私に忍び寄る。

もうここまでなのか。絶望しかけたその時。

横合いからチェーンクロスの一撃が放たれ、回復呪文が私にかけられた。

「大丈夫か!?」

なんとか私は頷いた。

「僕たちが来たからもう大丈夫だよ」

確かに私はもう大丈夫だ。だって、この2人は。

「よし。それじゃあさっさと倒しちまおうぜ、アベル!」

「ああ。ヘンリー」